

坂の上通信

令和三年八月二十三日
広島市立美鈴が丘高等学校
新聞文化部(四〇三演習室)

新聞部 全国総文へ

全国1333の新聞部と交流

2年ぶりに現地開催される全国高等学校総合文化祭(以下総文)に、新聞部の2年5組の谷本君、同2組の川崎君が参加した。

新聞部門は8月4日(水)から6日(金)の日程で、和歌山県和歌山市にある開智中・高等学校にて行われた。全国から1333校もの

新聞部が集まり、あらかじめ分けられたグループで県内各地を取材、新聞を作成するというものだ。

初日は、グループごとに自己紹介を行い、各校が制作してきた新聞の交換する生徒交流会が行われた。

二日目の午前には開会式、年間紙面審査賞の表彰式等が行われた。この賞は新聞部にとっては最大の賞で、広島県では、崇徳高校が最優秀賞の1つに選ばれたほか、美高も奨励賞を受賞した。今年度は



初対面のグループだが、活発な話し合いが行われた

全国の舞台ということで、初日の生徒交流会では緊張していました。班内での優秀賞校だった東京の錦城高校の新聞部の交流新聞制作では班のみんなが気軽に話しかけてくれたので

自分が思うことを紙面にすることができました。また他校が日頃制

作している新聞も見る事ができる写真が複数枚使っていたり、コラムも興味を持てるような内容になっている工夫もありました。私

全国の舞台で 部長 谷本君の話

私たち奨励賞校という賞を頂きましたが、さら

を見せたいと、伝に上の賞を目指し頑張っていました。良い経験になりました。



快晴の元、古墳群を歩く

紀伊風土記の丘を歩く

二日目の取材活動では紀伊風土記の丘と旧中筋家住宅の二か所を訪ねた。紀伊風土記の丘は国の特別史跡

「岩橋千塚古墳群」の保全と公開を目的として1971年8月に開館した考古資料・民俗資料を中心とした県立の博物館施設である。当日はポ

ランティアガイドの玉置さんのお話を聞きながら古墳群を巡った。

その後資料館を訪れ、出土した独特な見た目の多数の埴輪や、渡来人から伝わったとされる鉄製の鍛冶道具などを見学した。

歴史から防災を学ぶ

二日目の班別研修では、体験的に地震について学ぶことができる「稲むらの火の館」を取材した。稲むらの火とは次のような話だ。

1854年、安政南海地震の際、村の高台に住む濱口梧陵は、海水が沖合へ退いていくのを見て津波の来襲に気付く。村人たちに危険を知らせるため、梧陵は刈り取ったばかりの自分の稲の束に松明で火をつけた。火事だと思ひ消火のため高台に集まった村人たちの眼下で、津波は猛威を振るう。梧陵の機転により村人たちは津波から守られた、というも

の。稲むらの火の館はヤマサ醤油7代当主でもあったの濱口梧陵の邸宅を改修して誕生した。館内にある津波シミュレーションでは、津波の模型を用いて、津波の仕組み、対処法、発生実験などが展示されており、津波に対する知識や理解を深めることができた。3D映像体験では、稲むらの火を再現したドラマで展示物とは違った学習ができた。



館内で地震を学ぶ

「醤油醸造発祥の地紀州湯浅」として日本遺産にも登録された。資料館案内係の木下さんは「角長の醤油は1年以上かけて発酵させるので、濃厚で後味がさっぱりしている」と魅力を語った。ジャーニスの伊野尾慧さんが湯浅醤油を使った卵かけご飯を絶賛したこともあり、人気になりそうだ。(谷本惟斗)

特産品を味わう総文弁当

総文では、その土地の特産品を生かした総文弁当を食べることが出来る。中央には和歌山山印南町の一品だ。右下にあるのは「梅肉うどん」。紀州梅は実が大きく、皮がやわらかいことで有名だ。和歌山の多くの特色が入っていた弁当だった。



色とりどりの総文弁当

最終日の お楽しみ

最終日の閉会式後は和歌山マリナーシティを訪れた。和歌山の海に浮かぶ人工島和歌山マリナーシティは、毎日マクローの解体ショーを開催している観光魚市場の黒潮市場や、温泉で有名な和歌山ならではの紀州黒潮温泉などの施設に加え、中世の地中海の港街をモチーフにしたポルトヨーロッパなどの施設のあるリゾートアイランドである。

短時間の滞在ではあったが二つのアトラクションを体験しヨーロッパの街並みを堪能したのち、和歌山の特産品であるみかんを使用したみかんシャーベットを食べた。シャーベットを口に入れたときの第一印象は「とても濃厚」であった。ひんやりとした食感が心地よく、普段食べるみかんに比べ、よりみかん本来の酸味や甘みを感じられる一品であった。



冷たいシャーベット

編集後記

新聞部二回目の全国総文参加です。よい経験になりました。